

研究ノート

モリスのユートピアに関する一考察

山田眞實

— 序 —

Thomas More がギリシャ語の否定を意味する ‘ou’ と、場所を意味する ‘lópos’ を結合させて ‘utopia’ という語をつくり出し *Utopia* を著して以来、ユートピアという言葉は ‘no-where’ 即ち空想郷、理想郷、無可有郷といった概念をあらわすようになった。しかし、ユートピア＝空想郷＝理想郷という定式は必ずしも正確であるとはいえない。なぜならば、ユートピアは理想性をその必然的要素として持っていなければならないのに対して、空想郷は必ずしも持っていなくてもいいからである。また、ユートピアは社会改善のための一つの理想的ヴィジョンとして描かれるのであるから、そこには必ず将来における実現の可能性をひめていなければならないのに対して、空想郷は当初から実在の可能性をほとんどもっていない場合が多い。即ち、ユートピア文学とは人間社会の最善形態を描こうとするものであり、(1)フィクションであること、(2)ある特定の国家や共同体を描いていること、(3)その虚構の国家や共同体の政治構造が主題となっていること、等の条件を備えていなければならない¹⁾。

以上のような点からいえば、歴史上初めて理想社会を描いてみせたのはギリシャの哲学者 Plato であった。彼が『共和国』に理想的ではあるが閉ざされた世界を描き出して以来、Saint Augustine, T. More, T. Campanella, F. Bacon, F. Rabelais, Wistanley, E. Bellamy, W. Morris といった人々がユートピアの伝統をつくりあげてきたのである。しかし、理想的な社会のあ

り方を想像する場合、科学的精神による合理化を志向するあまり、権威主義的な傾向を示すことが少くない。ルネサンスや啓蒙時代の多くのユートピアのもつ権威主義的、全体主義的精神は、人間の生命のもつ本質的な有機的自由を科学的、合理的な枠組みでおさえ込もうとするのである。Herbert Read が *Anarchy and Order* (1954) の中で 'It is only in those writers who retain a sense of organic freedom—Rabelais, Diderot, and Morris—that the Utopia is in any sense libertarian. It is no strange coincidence that these are the only inspiring utopias.'² と述べているが、その有機的自由の感覚を保持していた William Morris が、未来にその実現の可能性を信じて描いたユートピアとは如何なるものであったのか考えてみたい。

(1) *News from Nowhere* の成立過程

万能の天才といわれる程モリスの活動は多岐に亘っているが、生前のモリスはロマン派の詩人として有名であった。そしてその量の点において驚異的な実績を示し、特に *The Life and Death of Jason* (1867) や *The Earthly Paradise* (1868-70) の出版後はヴィクトリア朝期の最も有名な詩人の一人となったのである³。モリスは長詩 *The Earthly Paradise* の前書きである 'Apology' において自らを 'Dreamer of Dreams'⁴ と称しているが、彼の半生はまさしく夢想家としての生涯であったといえよう。そしてたぐい稀なユートピアンとして、モリスはユートピア文学史上最大の傑作の一つである *News from Nowhere: or an Epoch of Rest, Being Some Chapters from a Utopian Romance* を著した。モリスは 'The only safe way of reading a Utopia is to consider it as the expression of the temperament of its author'⁵ と考えていたが、では、モリスの気質の表現である *News from Nowhere* の不思議な活力と豊かな安らぎに満ちた世界とはどのような世界なのであろうか。

The Earthly Paradise において早くからモリスはユートピア願望を表明していたが、その願望が具体的な作品として著わされたのは約20年後の *A Dream of John Ball* (1886~87) と *News from Nowhere* (1890) であった。共に *The Commonwealth* に連載されたものであったが⁶、モリスは *A Dream of John Ball* において革命とはどのようなもので、如何にして遂行されるかを描き、*News from Nowhere* では社会主義革命後に実現されるであろう理想社会を具体的に描き出している。即ち、この二作品は相互に補完関係にあるといえよう⁷。

News from Nowhere は副題からも明らかなようにロマンスの形式を採用しているが、これは従来のユートピア文学史上極めて珍しい、新しい試みであると考えられる。なぜならば、モアの『ユートピア』をはじめとして従来のユートピア文学においては、ユートピアの現実性を読者に対して説得性のあるものにするため、未知の土地への旅行談を写實的に描くルポルタージュ形式が採られることが多かったからである。つまり、極めて本当らしく、写實的に描くというのが従来のユートピア作家の多くに共通した態度であった。故に、*News from Nowhere* の場合のように、非現実的とみなされる「ロマンス」という言葉を題名に用いるということは考えられないことであった。しかし、モリスは最初からそれが空想的ロマンスであることを明らかにしている。即ち、*News from Nowhere* はその未来社会の細部がリアルに描かれておらず、精密な未来の設計図とはいえないということを明示しているといえよう。モリスにロマンス形式を採用させたのは、彼の幼年期から育まれてきた中世ロマンス嗜好が反映していると考えられるが、更にもう一つの理由が考えられる。それは19世紀末に近くなると、植民地獲得競争の激化、あるいは交通の便の飛躍的な発展に伴い、この地球上から実際に未知の土地がほとんどなくなってしまったということである。即ち、地球上のどこか知られざる地にユートピアを設定するという従来の形式は採用が困難になったのである。空間的移動が困難になれば時間的移動しか考えられない。つま

り、ユートピアを遠い過去か未来に設定せざるを得なくなったのである。*News from Nowhere* に描かれる社会は、場所はロンドンであり、時代は21世紀であるが、モリスがこのような舞台設定をせざるを得なかったのは以上のような理由によるものと考えられる。*A Dream of John Ball* において、1381年の Wat Tyler の乱を舞台として革命遂行の過程を描いたモリスが、その結果としての具体的なユートピア社会を示すために未来にその舞台を設定したことは、彼の社会主義者としての未来にかけける希望の表明であり、不満と不平の現実をのりこえようとする意思の表現であろう。以上のような意味において、モリスが理想社会を未来に描こうとする時、彼が採用する形式は具体的、写実的なルポルターージュ式旅行談ではありえず、現在とのつながりが希薄なロマンス形式であったのである。しかし、重要なことは、*News from Nowhere* を単なる空想物語と解すべきではないということである。つまり、*News from Nowhere* は現実味のない観念的な空想物語ではなく、現実と空想が混然一体となった世界なのである。

(2) *News from Nowhere* の構造

全篇32章からなる *News from Nowhere* はモリスが自ら設立した「社会主義者同盟」(Socialist League) の機関誌 *The Commonwealth* に連載された社会主義宣伝のための作品であったが、モリスがこの作品を発表した直接の動機はアメリカの作家ベラミーの *Looking Backward* (1888) に描かれたユートピア社会に対するモリスの怒りであった。独占資本主義が組織化され、機械文明が高度に発達した社会の中でくり広げられる21世紀の官僚主義的な社会主義の世界が描かれたこの作品に対して、モリスは1889年6月22日号の *The Commonwealth* に激しい批判の記事を掲載した⁸。しかし、*Looking Backward* は出版と同時にベスト・セラーとなり、ヨーロッパのいくつかの言語に翻訳された⁹。そしてこの作品はイギリスの社会主義者達の間にも大きな反響をまきおこしたのである。事の重大性に気づいたモリスは、*Looking*

Backward に対抗して、自らも彼自身の一つのユートピアを提示する決意をしたのである。その結果うみ出されたモリスのユートピアはベラミーのそれとはことごとく対立する世界であった。

以上のように、モリスの *News from Nowhere* 執筆の直接の動機を与えたのは *Looking Backward* であったが、同時に R. Jefferies の *After London* (1885) が彼に与えた影響も見逃すことはできない。モリスは Burne-Jones 夫人に宛てた手紙 (1885) の中で、'I read a queer book called 'After London' coming down: I rather liked it; absurd hopes curled round my heart as I read it.'¹⁰ と述べている。*After London* は、ある突然の大変異によって、住民の大半が姿を消した後のイギリスの社会を描いたものである。森林地帯は消滅し、峡谷は沼沢となり、絶えまない争いがくり広げられる腐敗した貧しく暗く中世的なこの社会では農奴制がとられ、生き残った住民は最少限度の粗末な日用品を使って生活をしている。しかし、この未完結の小説の最後の部分には周囲の遊牧民族の中に新しい国家が誕生するきざしが暗示されている。モリスはバーン・ジョーンズ夫人に宛てた別の手紙(1885)の中で、資本主義社会つまり近代文明が存続するよりは、世界が悲劇的な破局をむかえ、*After London* に描かれているような野蛮な未開状態に陥った方がましだと述べている¹¹。しかし、この *After London* に描かれた世界はモリスにとっては次善の世界であり、彼はこの暗く貧しい未開状態に向って世界が進むことから人類を救うため、社会主義革命が一刻も早く実現されることを強く願った。以上のように、資本主義社会が破壊された後の社会が描かれた *After London* が、モリスにユートピア創造の決意をうながした要因の一つと考えられるのである。

モリスはバーン・ジョーンズ夫人に宛てた手紙 (1883) の中で、詩歌と手工芸が消滅の危機に瀕していると指摘し、更に '... the propaganda gives me work to do, which, unimportant as it seems, is part of a great whole which cannot be lost, and that ought to be enough for me'¹² と述べてい

る。即ち、モリスにとって社会主義宣伝の仕事は、理想社会の実現を目的としたものであると同時に、ほろびゆく諸芸術を死滅から救済するという緊急の使命をになつたものであった。故に、*News from Nowhere* に於るユートピアへの訪問者 William Guest が同盟の一員となっていることは当然であろうが、それはまた極めて特徴的なことであると思われる。なぜならば、ユートピア小説において党派性を前面に打ち出すということはあまり例のないことであるからである。

さて、William Guest は19世紀末の或る冬の夜、漠然とした未来への希望を抱いて眠りについたはずなのに、21世紀の6月の早朝に目覚める。モリスはここで季節を冬から夏へと転換させているが、彼にとって「夏」という季節は特別の意味をもつものであった。ユートピアの住人 Dick が終章で 'One thing seems strange to me, that I must needs trouble myself about the winter and its scantiness, in the midst of the summer abundance.'¹³ と語っているが、モリスにとって夏とは 'Thames sparkling under the sun'¹⁴ であり 'a delicious relief caused by the fresh air and pleasant breeze'¹⁵ をもたらすものであった。つまりモリスにとって「夏」とは豊かさや美しさの象徴であった。また彼の夏への愛好は *A Dream of John Ball* にも明らかである¹⁶。モリスにとって、夏と冬という季節はそれぞれ天国と地獄を象徴するものなのである。

Guest は新しい社会の成立とそのあり様について、歴史の生き証人である Hammond 老人から詳細に聞くが、では次にこのユートピアをいくつかの側面から検討してみたい。

(i) 環境。ロンドンを代表とする大都市はすべて消滅し、自然が生気をとりもどしているこの社会では、人口は全土に平均して分散している。そして小都市が美しく修復された状態で残存しているが、都市対農村といった区別は全く存在しない。全土が一つの庭園となっているこのような世界は「アルカディア型」ユートピアの典型といえる。ユートピアは元来、「田園型」

と「都市型」に大別されるが、前者はあくまで自然と人間との調和を目指すものであり、後者は人間による自然の征服を志向するものである。ペラミーの *Looking Backward* をはじめとする「都市型」のユートピアが近代ユートピア文学の主流をしめ人気を得て来た中で、モリスの「田園型」即ち「アルカディア型」ユートピアは、W. H. Hudson の *A Crystal Age* (1887) と並んで極めて少数の例外的なものである。「近代主義」と鋭く対立する「アルカディア型」ユートピアは、近代都市社会のうみ出したもの、即ち、都市と農村の対立、機械への従属から生じる労働疎外、個人と個人の内面的つながりの希薄化などをことごとく否定したものである。人間の生の内的な充足を志向する「アルカディア型」ユートピアの代表作品が *News from Nowhere* なのである。

(ii) 社会構造

(a)政治面。第11, 12, 13章において語られているように、社会主義革命を経て150年たった21世紀のこの世界では、国会議事堂が肥料倉庫となっており、中央集権的な議会政治は完全に消滅している。即ち、「政治」というものはいっさい存在しないのである。そして直接民主制が、'commune', 'ward', 'parish' 等を単位として実施されている。つまりこの社会では地方分権が確立されており、そしてそれぞれの共同体が一大連合をつくりあげているのである。また 'mote' と呼ばれる区民集会においては、どんな些細な問題に関しても全員の意見の一致がみられるまで徹底的に話し合いが行われる。何ごとに対しても合理化を目指し、非能率を嫌う近代人の精神とはみごとに相反する世界であるが、時間の奴隷となるよりは民衆の総意を徹底的に重視するモリスの考え方は真の意味での民主主義といえよう。政府が存在しない以上それを支える軍隊や警察もない。また私有財産は認められず、法律も裁判所や監獄も存在しないが、ただ病氣は犯罪と考えられ、罰として自責の念が与えられるのである。

(b)経済・産業面。第15章において、世界市場が消滅し貨幣経済が姿を消

し、かわって自給自足経済体制がとられていることが述べられている。ほとんどすべての美しく有用な日用品は手工芸でまかなわれており、手工業がこの社会における主要産業となっている。つまり、この社会においては、労働者を機械の歯車の一片としてしか扱わない非人間的な機械制大量生産も、公害の原因となる大工場も全く消滅しているのである。また全土が田園もしくは牧場となっており、干し草刈りが国民的行事となっていることから分るように、農業・牧畜業が重要な産業となっている。更に、テムズ河で鮭漁が行われていることから漁業も主要産業となっていると考えられる。また運輸面からいえば、鉄道が消滅し、代りに水路の利用や馬車運送が復活しているのである。

以上のような理想的な社会状態を共産主義社会であるとモリスは考えている。彼は社会主義を共産主義に至るまでの過渡的なものと見做しており、社会主義の必然的發展である共産主義の世界を究極の理想社会と考えていた¹⁷。F. Engels が「共産主義の原理」の中で「もしすべての資本、すべての生産と交易が国民の手にあつめられるならば、私的所有は自然になくなり、貨幣は無用になり、生産がふえ、また人間が変化するので旧社会の最後の交易形態がなくなるであろう」¹⁸ という共産主義的ユートピア観を示していることを考えれば、モリスのユートピアを共産主義社会と考えることは間違いではないであろう。

しかし、マルクス主義的社会主義の考え方によれば、革命後に明白な中央集権制が採用される。即ち、プロレタリアート独裁制のもとに、全ての生産手段や運輸手段が国家の手に集中され、国家の指導のもとで産業軍が編成されるのである。このプロレタリアート独裁の中央集権国家からやがて無階級社会が生じるというマルクスの考え方と、モリスのユートピアにみられる社会体制とは決して同一のものとは考えられないのである。たしかに *News from Nowhere* に描かれるユートピアは社会主義革命によって成立したことになるが、Hammond 老人の口からは、革命後にたとえ過渡的なものであ

るにせよ中央集権制を採用したという言葉は聞かれぬ。即ち、革命と同時にコミュニューンの一大連合が成立しているような印象を読者に与えるのである。これは、モリスが、たとえ一時的なものであっても、プロレタリアート独裁による中央集権制を本能的に嫌ったからだと考えべきであり、特筆すべきことであると思われる。自らマルクスの著書を苦勞して読み、イギリスにおけるマルクス主義の紹介者として高い評価を受けているモリスであるが、実際に彼が描き出したユートピアには、中央集権制を志向するマルクス主義のもつ権威主義的側面は完全に欠落しており、そこには極端に権力を嫌悪するモリスのリバタリアンの気質が強く感じられるのである。

個人を抑圧するいっさいの権力、政治が消滅した無階級社会——これがモリスのユートピアである。そしてこの社会は真の意味での無政府主義社会そのものである。モリスは *A Dream of John Ball* において司祭 Ball に 'Forsooth, brothers, fellowship is heaven, and lack of fellowship is hell: fellowship is life, and lack of fellowship is death'¹⁹ という有名な言葉を語らせているが、この 'fellowship' がモリスのユートピアにおける根本的な社会原理となっているのである。つまり、この社会に秩序を与え、人間同志を、そして各共同体を有機的に結びつけて一大連合につくりあげているのが 'fellowship' の精神なのである。政治原理にかわって相互扶助の原理をとり入れ、人間相互の横のつながりを重視するモリスの考え方は、本質的に縦構造を志向し、中央集権制をとるマルクス主義とは相容れないものであるといえよう。

News from Nowhere を *The Commonwealth* に連載中の1890年当時、モリスは社会主義者同盟内の無政府主義者達と対立していた。そして遂にモリスは同盟と袂を分ち、同年 Hammersmith Socialist Society を設立した。しかし、当時モリスと対立していた Joseph Lane, Frank Kitz 等の無政府主義者達は暴力革命という無政府主義の破壊的側面を強調していた人々であり、本来の無政府主義からは、はずれていた。モリスが無政府主義を退けた理由は

第一には彼らの破壊的な行動を嫌ったからであるが、同時にモリス自身が無政府主義を個人主義という狭い意味で捉えていたからでもある²⁰。たしかに、モリスはユートピアの中で主権を人民に残しておく直接民主主義をとっており、いかなる民主主義をも否定し、主権を個人のためにとっておく無政府主義との間には差異が認められる。しかしながら、この一点をのぞけば、モリスのユートピアは無政府主義の本質、即ち、徹底した反権力、反議会主義、絶対的自由の確立、fellowship の精神に基いた内面的つながりのもとに成立する共同体、そしてその共同体相互の連帯といったものをすべて内包しているといえるのである。故に、モリスの描くユートピアはまさしく無政府主義の世界であり、ユートピア文学史上極めて稀な反権威主義的ユートピアといえよう。

以上のような無政府主義的ユートピアを描いたモリスに大きな影響を与えた人物として、ロシアの無政府主義者 P. A. Kropotkin や Robert Owen, Charles Fourier 等の空想社会主義者達が考えられる。クロボトキン²¹は1886年以来イギリスに長期に亘って滞在し、主著 *The Conquest of Bread* (1888) を著し、*Freedom* 誌を通してイギリスの社会主義者に影響を与えていた。1887年頃にはモリスの社会主義者同盟においてもクロボトキンの影響力はかなり大きなものとなっていた。モリス自身も友人に宛てた手紙の中でクロボトキンに対する深い好意と友情を告白している²¹。一方、クロボトキンもモリスに対して好意を寄せ、モリスの葬式に参列した際にも彼の死を深くおしんでいる。モリスが暴力的無政府主義を嫌悪しつつも、彼の描くユートピアが無政府主義の本質をみごとに映し出していることを考える時、クロボトキンの影響は小さいものではなかったと思われる。しかし、モリスはクロボトキンと違って「教育」に対して重きを置いた。モリスは社会主義者同盟を去る際、1890年11月5日号の *The Commonweal* に、かつての同志に宛てて次のような別辞を寄せている。

Our business. I repeat, is the making of Socialists, i.e., convincing people that Socialism is good for them and is possible. When we have enough people of that way of thinking, *they* will find out what action is necessary for putting their principles in practice.

Therefore, I say, make Socialists. We Socialists can do nothing else that is useful, and preaching and teaching is not out of date for that purpose.²²

モリスは40歳を過ぎてから社会主義活動を始め、以後死の直前までの約20年間社会主義者として活躍したが、その間彼は社会主義活動の原点を労働者の教育におき、600回以上の講演を行い、社会主義宣伝のために数限りない論文や記事を書いた。モリスは大衆に社会主義を理解させ、大衆に革命の主体としての自覚を与えることが最も重要だと考えたのである。この「教育」を重視するという考え方は、イギリスに先駆的、伝統的にあるものであり、この意味においてモリスはオーエンと共に極めてイギリス的な社会主義者であった²³。

次にオーエンについてはモリスの伝記作家 J. W. Mackail が 'He [Morris] praised Robert Owen immensely'²⁴ と述べているように、モリスはオーエンを初期社会主義者達の中の第一位においた。そして1800年にはじまるオーエンの偉大な New Lanark の実験について深い共感的理解を示したが、同時にその失敗の原因をも分析している。またオーエンが共産主義に対して懐疑的であった点に関しては、彼が歴史の力を実感しなかったためであるとモリスは考えていた²⁵。最後にフーリエに関しては *News from Nowhere* の第10章と第15章に、彼に対しての言及がみられる。フーリエは近代資本主義の痛烈な批判とならんで、計画社会体制を描いたことで有名であるが、彼の協同実験社会、つまり 'phalanstery' に関してモリスは Hammond 老人に 'Remember, again, that poverty is extinct, and that the Fourierist phalangsteries and all their kind, as was but natural at the time, im-

plied nothing but a refuge from mere destitution.²⁶ と語らせている。しかし、モリスがフーリエから学びとった最大のもは「労働」に関する考え方であった。モリスの労働観は、その多くを John Ruskin の *The Stones of Venice* (1851-1853) の中の一章 'The Nature of Gothic' から学びとったものであるが²⁷、ラスキンの影響と共にフーリエの影響も見逃すことはできない。15章において、労働の報酬がない場合に、どういう風にして人々を働かせるのかという Guest の問に対して、Hammond 老人は次のように答えている。

The reward of labour is *life*. . . the reward of creation. The wages which God gets, as people might have said time ago. If you are going to ask to be paid for the pleasure of creation, which is what excellence in work means, the next thing we shall hear of will be a bill sent in for the begetting of children. . . Fourier, whom all men laughed at, understood the matter better.²⁸

以上のように、本質的に反権威主義的気質を強くもっていたモリスが無政府主義者クロポトキンや、オーエン、フーリエといった空想的社会主義者達の考え方に強くひかれ、その影響を受けたことは当然のことであった。この点から考えても、モリスのユートピアは本質的にマルクス主義がもつ中央集権的な側面とは相容れないものである。最晩年まで戦闘的なマルクス主義者としての信念と行動を捨てず、マルクス主義の普及につとめ、社会主義における究極の理想は共産主義であると信じていたモリスであったが²⁹、彼の描くユートピアは、徹底した反権威主義に貫かれた無政府主義の世界である。即ち、モリスの理想社会はマルクス主義を奉じる彼の政治理念と、ロマン派の詩人としての彼の本質的気質の率直な表明であると考えられる *News from Nowhere* との間には大きな矛盾が存在するといえよう。1955年に E. P. Thompson が *William Morris Romantic to Revolutionary* を著し、*News from Nowhere* を共産主義社会そのものとして読むべきでないし、モ

リスもそう読まれるつもりはなかったという説を打ち出したが、それ以前のモリス研究に於てはもちろんのこと、それ以後も、モリスのユートピアを共産主義社会と考えるものが多い。あるいは、共産主義社会とまではいわないまでも、社会主義的ユートピアといった曖昧な言葉で評価する場合が多い。これは、モリスのマルクス主義者としての信念や行動と彼の描くユートピアの間に横たわる大きな矛盾が原因であると考えられる。そしてこの矛盾の原因は、先にも述べたように、当時モリスと対立していた無政府主義者達の考え方、即ち、本来の無政府主義からはずれた、破壊的側面を強調する考え方をモリスが無政府主義だと考えたことにある。本来、無政府主義というものは、一さいの権力を否定するものである。政府も法律も存在しないこのような世界は、人間相互の人間性に対する絶対的な信頼がなくては成立しえないものである。この意味において無政府主義的な世界というものは極めてユートピア的な世界である。このような本来の無政府主義そのものに対するモリスの考え方の誤りが、先に述べた矛盾の原因であると思われる。モリスが本来の無政府主義の本質を理解していたら、彼は自らを無政府主義者と称したかもしれないのである。

(3) *News from Nowhere* に住む人々の生活

ユートピアの住人達は皆、若々しく、美しく、そして簡素だが手のこんだ美しい衣服をまとっている。彼らはいかにも住み心地のよさそうな堅牢で美しい家に住み、様々な中世風の建築物や豊かな自然に囲まれて生活している。子供達は学校における画一的、機械的学習から解放され、自然から多くを学びとるようになっていく。自然が子供達の学校であり、教師である。こうして子供達は鋭敏な感性を育て、何ごとに対しても深い関心を寄せるようになる。一方、大人達は劣悪な環境のもとでの機械の奴隷としての労苦から解放され、美しい装飾の施された良質の日用品の製造に熱中している。また女達は、極めて日常的である家事に大きな満足感を抱いて従事している。そ

して家族の示す感謝や満足が彼女達の報酬となるのである。以上のような極めて日常的な労働を神聖なものであるという考え方は Thomas Carlyle の労働神聖説³⁰にも見られるものであるが、モリスが日々の労働に喜びが伴わねばならないという考え方を学んだのは、ラスキンやフリーエからであった。この労働快樂説はモリスの龐大な講演、論文、記事の多くに語られている³¹が、この考え方が小説という形をとって表現されたのは *News from Nowhere* が最初であり最後であると考えられる。モアが utopia 島における労働時間を6時間にしたことはよく知られているが、ある一定の労働時間は人々の生活水準を維持してゆくには不可欠なものであり、義務であるという考え方が、ベラミーをはじめとするユートピア作家達の多くに共通した認識であった。つまり彼らは労働を生活を支える手段であるが故に苦痛なものと考え、労働時間の短縮を願ったのである。もちろんその時代の実際の労働条件にくらべて良好に描かれているものの、労働を義務と考えていることに変りはない。だからこそ、苦痛である労働を軽減する機械を大量に駆使し、節約された労働時間を余暇にあて、そこで生の充足をはかろうという発想が生れるのである。P. Lafargue の『怠ける権利』(1900)³²に示されている考え方はその典型といえよう。またベラミーの *Looking Backward* に述べられている労働観も以上のようなものである。ところが、モリスの労働観は、労働そのものを苦痛である労苦から快樂と喜びを伴う労働にしようとする全く新しい考え方であった。故に、モリスのユートピアでは、労働時間に関する規定は何もない。むしろ他のユートピア小説の中の労働時間よりも多くなっているのではないかと想像される。なぜならば、人間は本能的に快樂と喜びを追求するものであり、楽しい労働にどうしても多くの時間を費してしまうであろうからである。ユートピアの住人 Ellen が、'. . . you are not yet used to our life of repose amidst of energy; of work which is pleasure and pleasure which is work'³³と述べているように、ユートピアにおける労働は、しなければならぬものから自発的にしたいものへと変容を遂げているのであ

る。故に、モリスの理想社会にみられるように、住人達が仕事の減少を憂い、心配するということは、極めて特徴的なことだといえよう。*Erewhon* の作者 S. Butler は、将来機械が人間を支配するであろうという危機感を抱き、機械を批判したが、モリスは機械が人間から労働の喜びを奪い取るという危機感を抱いたのである。

(4) *News from Nowhere* を貫く精神

さて、*News from Nowhere* の最大の特徴は、そこに住む人々の生活が実に生き生きとしていることである。人間性への深い洞察を示したモリスが、生の充足という深遠な問題に如何に懸命にとりくんだかが全編を通して強く感じられる。モリスはユートピアを支える基本精神として Gothic 精神を考えた。第18章で Hammond 老人が 'More akin to our way of looking at life was the spirit of the Middle Ages'³⁴ と語っているように、ユートピアの精神が中世的な精神であったことは明らかである。近代主義を否定し、中世に理想を求める傾向はすでにバトラーの *Erewhon* にも見られるが、過去の世界に理想を求めるという考え方はユートピア史上数少ないものといえる。

モリスの中世愛好に理論的基盤を与えたのはラスキンであったが、モリスの中世への関心は幼少期からのものであった。7歳になる前に Walter Scott を読み、その中世的世界に魅了され、また8歳の時に父と共に訪れた Canterbury 寺院のゴシック建築の美しさに心を奪われた。また玩具の鎧を身につけ、Epping Forest で小馬を乗りまわし、騎士ごっこに時を忘れた。このように幼少期から自然に育まれていった中世への愛好は、やがて「アーサー王物語」に彼を熱中させた。そして *The Earthly Paradise* をはじめとする長大な詩やロマンス、*A Dream of John Ball* や *News from Nowhere* 等の中世及び中世的世界を背景とする作品を生み出すことになったのである。しかし、重要なことは、モリスの中世讚美が決して一方的なものではなかったということである。モリスは E. B. Bax との共著 *Socialism: Its Growth*

and Outcome (1893) の第5章 ‘The Rough Side of the Middle Ages’ において中世の好ましくない点について論及しているし³⁵、また講演 ‘Wealth, Art and Riches’ (1883) においては中世を ‘the barbarous, superstitious, unpeaceful Middle Ages’³⁶ と述べ、‘Art and the Beauty of the Earth’ (1881) では ‘Do not misunderstand me; I am not a mere praiser of past times.’³⁷ と語っている。こうしてモリスが中世の未熟な側面を認めながらも、中世に理想的な価値を見出したのは、中世に存在していた Gothic 精神が近代には失われてしまったと考えたからに他ならない。

では次に、この Gothic 精神がどのようなものであるのか、またモリスがそこから何を学びとったのかを考えてみたい。

多くのユートピア小説の場合、芸術を単なる生活の装飾物としてしか捉えず、芸術家を非生産的な職業であるとみなしている。つまり、芸術家を一つの孤立した職業としてしか考えないのが普通であるが、モリスのユートピアの場合、ユートピアの住民すべてが芸術家なのである。この点はユートピア文学史上極めて異例のことであり特筆すべきことであると思われる。モリスにとって芸術とは ‘works of art are man’s expression of the value of life, and also the production of them makes his life of value’³⁸ というものであるが、この考え方が第26章における家の建築場面によくあらわれている。芸術活動が民衆レベルで行われる場合、民衆の協同作業による諸芸術の結晶である建築物は造り手にとっても、使い手にとっても最も重要なものであるとモリスは考えた。そして、彼が *A Dream of John Ball* で強く主張した fellowship の精神が、この民衆の協同作業の中では十全に発揮されるのである。即ち、建築に参加したすべての人々をつなぐ共通感情が fellowship の精神であった。ここに至って建築は一つの芸術といった枠を超越し、人と人を有機的に結びつける一つの媒体となるのである。建築に参加した人々はすべて芸術家である。そして、すべての芸術家の協同作業の記念碑である建築物がそれを使う人に感銘を与えるとすれば、それはその建築物が fellow-

ship の具現したものであるからである。モリスが特に中世の教会建築を高く評価したのは以上のような点にあった。

また中世の教会芸術は装飾の芸術でもあった。Gothic 建築及びその中に内包されている様々な道具一人々の日常の「用」に供されるもの—などに施されたおびたしい装飾は、単なる付加的な「飾り物」ではなく、その制作に携わったすべての人々の喜びの表現であるとモリスは考えた。そして彼は、工芸デザイナーとしての、あるいは実作者としての経験によって、「装飾する」という行為の中に「あそび」の要素を含めて日常の「用」に資するという画期的な思想に到達したのである。そしてこの「あそび」の精神こそが *News from Nowhere* の住民達の生活を生き生きとさせ、彼らの生の充足を可能にしているものなのである。J. Huizinga が *Home Ludens* (1938) の中で「真の文化は、なんらかの遊戯内容をもたずには存在してゆくことはできない」⁹⁹ と述べているが、*News from Nowhere* を貫く基本精神はまさしくこの遊戯精神であるといえよう。「あそび」のもつ非功利性こそが、モリスのユートピアを余裕のある生き生きとしたものになっているのである。即ち、「あそび」が労働をはじめとしてユートピアの住民達の生活を支える実質的な精神となっているのである。モリスは19世紀の時代精神である功利主義に対してのアンチ・テーゼとして遊戯精神を考えたのであろう。K. Kerényi が「遊びがユートピア論者であるためには必要である」¹⁰⁰ と述べているが、モリスこそはこの意味において真のユートピアンの一入であったといえよう。

以上のように、モリスは中世の Gothic 精神から、fellowship の精神と遊戯精神を学びとり、これらの精神を *News from Nowhere* を貫く基本精神としたのである。

(5) ユートピアをもたらしたもの —革命—

ユートピア文学の多くはすでに成立している理想社会を描くことを第一の

目的としているという点から考えると、モリスが *News from Nowhere* の中で最も長い第17章全部を費して、その成立過程、即ち革命の過程を詳細に述べていることは特筆に値するものといえよう。更に、その革命が武力革命によるものであったことも極めて特徴的であるといえる。

モリスは B. Shaw をはじめとするフェビアン主義やベラミーの主張する平和革命理論を無効だと考えていたが、これには彼自身がいわゆる「血の日曜日」（1887年11月13日）にデモ隊の一員として参加し、屈辱的な敗北を経験したことが影響していると考えられる。この時の屈辱的体験を、モリスは Guest の口をかりて第7章においては ‘We had to put up with it; we couldn't help it’⁴¹ と語っている。こうしてモリスは議会改革運動に絶望し、否定的な態度をとるようになった。このモリスの態度は無政府主義者達と同様のものであったが、彼はあくまでも無政府主義者達との共闘を拒否し、マルクス主義者としての立場を貫こうとした。そしてモリスは *News from Nowhere* の中に、彼のマルクス主義的な革命戦略構想とその革命の成立過程を詳細に描き出したのである。

「革命は平和のうちに訪れたのか」という Guest の間に Hammond 老人は次の様に答えている。

“Peacefully?” said he; “what peace was there amongst those poor confused wretches of the nineteenth century? It was war from beginning to end: bitter war, till hope and pleasure put an end to it.”⁴²

更に、その戦争即ち革命は、ストライキや工場閉鎖、兵糧攻めなども含むものであり、また武器をもった実際の戦闘でもあったと述べている⁴³。急進派アイルランド人、社会主義者達が参加し、警官の襲撃をうけ数人が死亡、数百人が負傷した Trafalgar 広場におけるモリス自身の屈辱的な体験（1886）が、第17章の基本部分となっている。更にモリスは、フランスの二月革命やパ

リ・コミュニケーション、ロンドンのドック・ストライキ等から取材し、「血の日曜日」の Trafalgar 広場での体験を基本としながら、これらの諸事件をからませ、卓越した想像力と構想力で迫力のあるみごとな一つの革命物語を構築したのである。特に「血の日曜日」に関しては、Hammond 老人が 'That massacre of Trafalgar Square began the civil war'⁴⁴と語っているが、ここでモリスは自らの屈辱的な敗北の体験を革命の端緒と捉え、積極的な意味を与えているのである。

News from Nowhere の文学的な構成の中で、この第17章はきわ立った特徴をみせている。即ち、牧歌的なやすらぎにみちたユートピアの世界に突如具現されたリアリズムの世界なのである。現実の諸事件に取材し、広大な構想力をもって描かれたこの章は夢と現実の世界、つまり「理想」と「現実」との鮮明な対照を我々に見せてくれる。常に理想を追求することがロマンティシズムの一つの特徴であるとするならば、モリスのロマン派の詩人としての本質が、この理想と現実というみごとな対照を描かせたといえるであろう。

19世紀社会をこの世の終りと考えていたモリスが、この終末意識から逃れ、革命の最終的な所産としての新しい理想社会を獲得するまでの大きな産みの苦しみがこの第17章にはみごとに描き出されているのである。天国への扉を渾身の力をこめて開こうとするようなモリスの気迫が感じられる章である。

(6) *News from Nowhere* の現代的意義

以上のようなモリスのユートピアに対しては様々な見方ができよう。ユートピア文学の主流がペラミーの *Looking Backward* のような都市型のユートピアだと考えるならば、モリスのユートピアはあまりにも非現実的なアルカディア型ユートピアに見えるかもしれない。しかし、モリスの徹底した反権威主義の精神が、彼にこのみごとな無政府主義的ユートピアを描かせたのである。彼はユートピアの住民の生の充足をまず考え、それを極めて自然なモリ

スらしい描き方で具象化してみせたのである。Gothic 精神から fellowship の精神と「あそび」の精神を学びとったモリスは、これらの精神をユートピアを支える基本と考えた。ユートピアとは作者の気質のあらわれであるというモリス自身の言葉通り、*News from Nowhere* の世界はまさしくモリス自身のユートピアなのである。

元来、ユートピアは真理を観照するための一つの典範であり、不満と不平の現状に対する批判として描き出されるものである。モリスは19世紀イギリス社会の諸悪の根源として近代主義を考え、その所産である「商業主義」に対してくり返し鋭い批判を行った。即ち、労働者達を機械の奴隷とし、利潤追求を至上の目的とする「商業主義」に激しい怒りを感じたのである。更に、「商業主義」が自然や芸術、そして人間生活そのものをも破壊することについて強い危機感を抱いていた。西欧に伝統的に存在する自然観、即ち、自然と人間を対時的に捉え、自然は征服すべきものであるという発想が資本主義社会において功利主義と結びつくようになる時、人々は自然をおしげもなく汚染し破壊するのである。このような西欧の伝統的な自然観に対して、モリスはいつも人間は自然の一部であり、美しい自然の中で生活することが幸福であると考えた。豊かな自然の中で、人間として十全な生活を送ること、つまり、労働そのものを「快樂」と感じ、「あそび」と感じることを、そして fellowship の精神によって人と人とが有機的なつながりをもつこと、このような世界こそがモリスのユートピアなのである。故に、モリスが *News from Nowhere* に 'an Epoch of Rest' という副題をつけたのは、彼が自然の回復を願い、人々がその豊かな自然の中で深い満足感を抱いて生活することを強く願ったからに他ならない。

また「商業主義」によって瀕死の状況におこまれている装飾芸術の救済にも、モリスは渾身の努力をおしまなかった。機械によってうみ出される粗悪で醜悪な日用品に対して怒りを感じたモリスが、工芸デザイナーとして、実作者として、また Arts and Crafts Movement の指導者として費した老大

なエネルギーと時間のことを思わずにはいられない。自然と芸術を破壊してやまない「商業主義」は人間生活そのものを脅かす。生の充足感も得られないまま、機械と時間の奴隷となって働かざるをえない労働者の現状をみてモリスが感じた怒りは、そのままユートピア創造へのエネルギーとなったと考えられる。

モリスが19世紀後半のイギリス社会の諸悪に対して感じた怒りは、100年後の日本に生きる我々自身の怒りでもある。近代主義、商業主義、自然破壊、人間関係の希薄化、複雑化する社会構造など、つまり近代文明そのものに対するモリスの深い問題意識は、今、我々自身のものでもある。そして、モリスがこのような問題に対してどのように考え、如何に対処しようとしたかを考える時、彼は我々に何らかの方向と暗示を与えてくれるものと信じる。更に、'a Utopian Romance' [*Italics Mine*] という副題からも分るように、モリスのユートピアは数あるユートピアの中の一つとして描き出されたものであり、絶対的、究極的な理想社会として我々に押しつけられるものではない。モリスはこの 'a' という不定冠詞の中に、「これは私のユートピアです。さあ、あなた方も、あなた自身のユートピアを想像してごらん下さい」という彼自身の強い願いをこめたのではないだろうかという気がしてならない。

'Go on living while you may, striving, with whatsoever pain and labour needs must be, to build up little by little the new day of fellowship, and rest, and happiness'⁴⁵ というユートピアの住人 Ellen の言葉には、*News from Nowhere* をしめくくるモリス自身の最後の強い願いがこめられている。モリスは 'instinct for freedom'⁴⁶ こそがユートピアを実現させる原動力となるものだと考えたが、一歩ずつ、少しずつ努力すること—これこそはモリスが我々におくり続ける永遠のメッセージであろう。少しずつ努力すること—そうすれば、きっと、モリスのいうように *News from Nonhere* の世界が 'it may be called a vision rather than a dream'⁴⁷ という日が来

るであろう。

エンゲルスは、モリスをイギリス労働運動の主流を占める人物の一人であると評価しているが、同時に Laura Lafargue に宛てた手紙（1886）の中でモリスを 'a settled sentimental socialist'¹⁸ であると述べている。このエンゲルスの言葉は *News from Nowhere* の作者としてのモリスの本質をみごとに表現しているといえよう。科学的社会主義者であるエンゲルスにとって、モリスの詩人としての、芸術家としての 'sentimental' な側面は高く評価すべきものではなかったかもしれない。しかし、モリスの社会主義者としての本質が、観念的な理論家としてのそれではなく、我々の多くに深い共感を与える普遍的なものであったということこそが重要である。

モリスは自らの信念を 'Socialism seen through the eyes of an artist'¹⁹ であると述べている。豊かな自然と美しい日用品に囲まれ、押しつけでない真の教育を受けた人々が互いに深い内的なつながりをもって、簡素ではあるが洗練された、たしなみのある生活を送る—これこそがモリスの社会主義者としての信念であった。そして、その信念が具体的な作品として結実したのが *News from Nowhere* であった。*News from Nowhere* において、モリスはロマン派の詩人として、美術工芸家として、そして社会主義者としての自らの全側面を有機的に調和させた彼自身のユートピアを描き出してみせたのである。

一人の芸術家の社会主義—このモリスの社会主義は、エンゲルスに「科学的社会主義者」としての高い地位をモリスに与えることを躊躇させた点であると同時に、モリスがいつまでも我々に深い共感を与える点でもあろう。

註

1 Cf. Glenn Negley and J. Max Patrick, *The Quest for Utopia* (College Park: Mc Grath, 1971), p. 3.

2 Herbert Read, *Anarchy and Order* (London: Faber and Faber Ltd., 1954), p. 22.

- 3 モリスは、1892年 Alfred Tennyson の死去に伴い桂冠詩人のポストを提供されるが謝絶した。
- 4 William Morris, *The Earthly Paradise* (London: Longmans, 1916), p. 1.
- 5 May Morris, *William Morris: Artist Writer Socialist* (New York: Russell and Russell, 1966), II, p. 502.
以下 *William Morris* と略す。
- 6 モリスは1883年に 'The Democratic Federation' に参加したが、その年の終りに同「同盟」は分裂した。彼は E. B. Bax らと共に脱退し 'Socialist League' を結成し、1885年2月に機関誌 *The Commonwealth* を創刊した。同誌ははじめは月刊、後に週刊となる。*A Dream of John Ball* は1886年11月より1887年1月にかけて、*News from Nowhere* は1890年1月から10月にかけて同誌に連載された。
- 7 この点に関しては拙論「モリスのユートピア—*A Dream of John Ball* を中心として—」*Asphodel* 18 (1984) (同志社女子大学英文学会) に述べた。
- 8 *William Morris*, II, pp. 501-507.
- 9 日本においては、明治36年(1903)に堺利彦が、自ら創刊した『家庭雑誌』の創刊号に、「ユートピアの話」と題して *Looking Backward* の抄訳を掲載したのが最初である。
- 10 W. Morris, *The Letters of William Morris to his Family and Friends*, ed. Philip Henderson (London: Longmans, 1950), p. 236. 以下 *Letters* と略す。
- 11 *Ibid.*, p. 236.
- 12 J. W. Mackail, *The Life of William Morris* (London: Longmans, 1912), II, pp. 116-117.
以下 *Life* と略す。
- 13 W. Morris, *The Collected Works of William Morris*, ed. May Morris (New York: Russell and Russell, 1966), XVI, p. 207. 以下 *Works* と略す。
- 14 *Ibid.*, p. 6.
- 15 *Ibid.*, p. 5.
- 16 *A Dream of John Ball* においても、主人公は1月の寒い夜に眠りにつき夏のある朝に見覚める。たしかに Wat Tyler の乱は1381年の6月におこっているが、冬に眠りにつき夏に目覚めるというパターンは *News from Nowhere* と同じものである。
- 17 Cf. W. Morris, 'Communism' *Works*, XX III, pp. 264-276.
- 18 Friedrich Engels, 「共産主義の原理」マルクス・レーニン主義研究所訳『共産党宣言・共産主義の原理』(東京: 大月書店, 1952), p. 94.
- 19 *Works*, XVI, p. 230.
- 20 Cf. W. Morris, 'Communism and Anarchism', *William Morris*, II, pp. 317-

- 327.
- 21 *Letters*, p. 251.
 - 22 *William Morris*, II, p. 518.
 - 23 「教育」を重視するというモリスの考え方には、モラリストであり、すぐれた説教師でもあったラスキンの影響も見逃すことはできない。なお森戸辰男著『オーエン・モリス』（1938）はモリスを教育の方面から評価しようとした数少ない労作である。
 - 24 *Life*, II, p. 104.
 - 25 *William Morris*, II, p. 311.
 - 26 *Works*, XVI, p. 65.
 - 27 この点に関しては拙論「Morris が Ruskin より学んだもの—労働観を中心として—」*Asphodel* 8 (1975)（同志社女子大学英文学会）に述べた。
 - 28 *Works*, XVI, p. 91.
 - 29 Cf. W. Morris, 'Communism' *Works*, XX III, pp. 264-76.
 - 30 Cf. Thomas Carlyle, *Past and Present* (1843), III.
 - 31 'The Lesser Art', 'Art and Socialism', 'Art under Plutocracy' 等をはじめとして多くの講演、論文の中で「労働」について言及している。
 - 32 Cf. *Le droit à la paresse* (1900) 田淵晋也訳「怠ける権利」（東京：人文書院，1972） Paul Lafargue (1842-1911) はフランスのマルクス主義者。マルクスの娘婿。モリスとも交流があった。1880年フランス労働党を結成し、マルクス主義のフランスへの導入、普及につとめた。
 - 33 *Works*, XVI, p. 204.
 - 34 *Ibid.*, p. 132.
 - 35 W. Morris and E. B. Bax, *Socialism: Its Growth and Outcome* (Chicago: Charles H. Kerr & Co., 1909), pp. 63-69.
 - 36 *Works*, XX III, p. 149.
 - 37 *Ibid.*, XX II, p. 163.
 - 38 *William Morris*, I, pp. 266-67.
 - 39 J. Huizinga, *Homo Ludens*, 高橋英夫訳『ホモ・ルーデンス』（東京：中央公論社，1963），p. 349.
 - 40 K. Kerényi, *Ursinn und Sinnwandel des Utopischen* (1963) 高橋英夫訳「ユートピアの原義とその変遷」、『海』1970年8月号（東京：中央公論社，1970），p. 209.
 - 41 *Works*, XVI, p. 42.
 - 42 *Ibid.*, p. 104.
 - 43 Cf. *Ibid.*, p. 104.
 - 44 *Ibid.*, p. 117.

45 *Ibid.*, p. 211.

46 *Ibid.*, p. 106.

47 *Ibid.*, p. 211.

48 F. Engels, Laura Lafargue に宛てた手紙 (1886年9月13日) *Frederick Engels, Paul and Laura Lafargue: Correspondence* (London: Laurence and Wishart, 1959), I, p. 370.

49 *Letters*, p. 187.

Synopsis

A Note on Morris's Utopia

Mami Yamada

William Morris (1834-96), poet and prose writer, artist and craftsman, was one of the pioneers of socialism in Britain.

Looking Backward, written in 1888 by E. Bellamy, a then little-known American novelist, had much success. It seemed to many to point to a practical solution for real problems, and it created a sensation among English socialists.

The flat equality, the almost military regimentation of labour, the bureaucratic organisation and the rigidity of life are part of his vision presented in *Looking Backward*. This quality of the socialism in Bellamy's utopia gave offense to Morris and he wrote a long and highly critical review in the Socialist League journal, *The Commonweal*, January 22, 1889. To him *Looking Backward* was a challenge which he could only answer by giving his own utopia. That is, *Looking Backward* was the immediate provocation that led Morris to write *News from Nowhere*.

News from Nowhere appeared as a serial in *The Commonweal* in 1890. It was the outcome of his years of thought and preparation and was, in fact, the climax of his whole work. Morris had learned from Ruskin to see art not as a special activity producing a special kind of luxury goods but as an essential part of the whole life of man. And he also was influenced by several contemporary thinkers, Kropotkin, a Russian

anarchist, Owen and Fourier, famous utopian socialists.

News from Nowhere is written as a "Utopian Romance", and the utopia presented is the society in the 21st century after a Socialist Revolution. In this Arcadian utopia, there is no parliament, government, laws, or private property, and all authority and power have disappeared completely. The essentials in the utopia are fellowship, abundance of the necessities of life, sun, air, and free space and joy in one's work.

Already the young Morris had correctly passed judgment on the misery of Victorian England, and he saw that no one could be happy except in a free society. He was a man passionately in love with the classless society. It was through Marxism that he found the road to the classless society. When speaking in general terms, he called himself a socialist, but he liked to use the word communist to define precisely the kind of socialist he was. But his utopia in *News from Nowhere* is a complete *anarchic* world in which we can not find any kind of authority and power. And it is the human nature of wealthy free people that is the centre and permanent interest of *News from Nowhere*, a human nature which poverty, exploitation, competition, fear and greed have had no part in shaping.

Morris loved the past, especially the later Middle Ages, and considered the Gothic Spirit, which he had learned from "The Nature of Gothic" in *The Stones of Venice* by Ruskin, as the spirit of his utopia.

In Chapter 17, the longest, Morris wrote many details of a Socialist Revolution, which he dated in the year 1952, and as a whole no other imaginary account of a revolution is so convincing as Morris's. And its success comes largely from the way in which Morris used his own experience in the actual movement, especially at the massacre at Trafalgar

Square (1886). For him, utopia was not somewhere remote in time or space but grew out of the existing society through struggle.

He did not imagine, nor did he claim in *News from Nowhere*, that socialism will make men perfect, but insisted that in the world of clear and transparent relationships all the problems of life would be encountered on a new and higher level and would be capable of solution. In his utopia a person is free in every sense of the word—ruler of one's environment and of one's self. His utopia, in which the evils of capitalism have entirely ended, produces a new quality of happiness, fellowship, toleration, universal courtesy, and delight in life.

News from Nowhere is important not only as a summing-up of William Morris's lifework but also for its contribution to a debate which is even more crucial in the 20th century than it was in the 19th. Most of the questions Morris raised in 1890 are the questions we are faced with now. And he offers his utopia as his personal answer to these questions, and he prompts us to consider the condition of our society and to measure it against the qualities of life that we hold most valuable.

Morris says in the last chapter: "Go on living while you may, striving, with whatsoever pain and labour needs must be, to build up little by little the new day of fellowship, and rest, and happiness"—this is his final message to us, faced with the same evils as those in his days.